音や音楽に浸り，協働的に音楽活動をする児童を育てる指導の在り方に関する研究

小川暁美*，伊藤陽平，松舘慧，白石文子**
*岩手大学教育学部附属小学校，**岩手大学教育学部
（令和３年３月４日受理）

１　はじめに

児童は，すぐに鳴りやんでしまう音や音楽からよさや美しさなどを感受する。よりよい感受のためには，音や音楽に浸り，それらに心を傾けながらよさや美しさをかみしめることが必要である。音や音楽に浸ると，児童は，そこから「何か」を感受する。感受すると，それを誰かに話したくなる。そして，自分と他者，或いは過去の自分と現在の自分の感受の仕方や音楽表現を比較し，音や音楽のよさや美しさを共感的または批判的に捉えて新たな音楽的価値を創り出す。そのような，個の中で，また個と集団で対話がおきる学びは，協働の学びであると考えられる。そのような協働的な音楽活動ができれば，児童は主体的に音や音楽に関わり，知識や技能を高め，思考・判断・表現力も伸ばしていくであろう。そして，音楽活動にさらに意欲をもって取り組んでいくであろう。

しかし，たとえ成人であっても，音や音楽から感受した「何か」を上手く言葉にできないことは多い。また，「自分が何を感じているのか，わからない」とか「自分の感じていることが正しいのか自信がない」など，他者に感想を伝えることは，様々な要因で容易ではない。小学校の音楽活動において，児童が，音や音楽に浸って「何か」を感受し，他者と音や音楽及び言葉などで対話したい，と思うためには，何らかの仕掛けが必要である。その仕掛けを「協働的な音楽活動」として授業者が設定し，授業展開を工夫すれば，他者との対話によって，児童が自分の感じ方や考え方を見つめ直したいと，主体的に音や音楽に関わるようになるのではないか。また，児童は，個と集団，及び個の中での対話によって，自分の感じ方や考え方に自信をもったり，よりよいものを創り出す意欲が湧いたりするであろう。

本研究では，音楽の授業や課外クラブの活動において，音や音楽に浸りながら「わかる」「できる」力（知識・技能）を身に付け，音楽的価値を思考・判断し，表現力も高まっていくような，協働的な音楽活動をする児童を育てる指導の在り方について考察する。

２　方　法

（１）研究方法

①生演奏の鑑賞の授業の実施とアンケート分析
②合唱部児童への個人レッスンとその後の児童の変容の考察
③文献研究

（２）研究計画

①１月　生演奏の鑑賞の授業とアンケート調査
②１月　合唱部児童への個人レッスン
③７～２月　文献研究

３　結　果

（１）５年生の鑑賞の授業

５年生 103 名を対象に，「詩と音楽の関わりを味わおう」という題材で扱う楽曲の鑑賞の授業を行った。男声，女声の独唱や，重唱，合唱の形態による響きの違いについて，熊友会ヴォーカル・アンサンブル（以下「熊友会」）９名の生演奏を CD の演奏と比較させ，生演奏の鑑賞によって，個の中でどのような対話がおきるのか，CD の演奏とは音楽への浸り方が違うのかを調査した。尚，新型コロナウィルス感染症対策として，音楽表現の活動は自粛し，感想交流にとどめた。

授業者が曲名，声種を説明しながら，演奏会形式による鑑賞の授業を実施した。９曲の独唱，重唱，合唱の合間に，児童は２人ペアや４人グループでの交流，感想発表，演奏者への質問を行った。その準備として，「①色々な歌声や合唱の響きを味わおう」「②演奏者の表現の工夫を感じとろう」と記載したワークシートを配布し，感じたこと・気付いたことを１曲ずつメモすることを推奨した。最後に，生演奏と CD 演奏を比較する選択式の「**振り返り**1」と，自由記述による「**振り返り**2」からなるアンケートを実施して，学習を振り返った。

①「振り返り1」選択式アンケート

３つの観点について，「CD での鑑賞と生演奏での鑑賞を比べて，より当てはまるものを〇で囲みましょう」と質問した。アンケートの集計結果は

表１のとおりである。

表１　振り返り1アンケート集計結果（100 名）

	CD	生演奏	同じ
1 歌声の響きを感じ取れた	0	100	0
2 集中して聴くことができた	2	96	2
3 心が動いた（発見・味わう）	0	99	1

無回答　３名

このように，ほとんどの児童が，CD での鑑賞よりも生演奏での鑑賞のほうが，歌声の響きを感じ取れ，集中して聴くことができ，心が動いたと感じていた。

②「振り返り2」記述式アンケート

下記のア，イ，ウなどについて，「わかったことや感じたことを書こう」と質問し，児童の記述を表２のようにまとめた。

ア　大人の歌声や色々な合唱の響きについて
イ　演奏者の工夫について
ウ　振り返り1の理由
エ　その他

表２　振り返り2自由記述のまとめ（103 名）

項目	質問		内容	回答数（個）	回答数（%）	それぞれの感覚を使った回答数（個）★ 聴覚	視覚	触覚（空気振動等）	頭脳	心・感情
1	ア	(1)	響き	46	16	46	1	46		46
2	ア	(2)	音色・声種の違い等	52	18	52	6	52	52	52
3	ア	(3)	パート関わり	26	9	26	10	26	26	26
4	ア	(4)	迫力・圧	37	13	37	4	37	7	37
5	ア	(5)	音程	2	1	2			2	
6	ア	(6)	雰囲気等	9	3	9	9	9	2	9
7	ア	(7)	もう一度聴きたい	8	3	8				8
			ア回答数　合計	180	63					
8	イ	(1)	姿勢，表情	34	11	35	35		35	35
9	イ	(2)	強弱	13	5	13		13		13
10	イ	(3)	プレス	6	2	6	6	6	6	6
11	イ	(4)	情景，歌詞	8	3	7	7		7	7
12	イ	(5)	声の出し方，歌い方	4	1	4	4		4	
			イ回答数　合計	65	22					
13	ウ	(1)	集中	8	3	8	1			8
			ウ回答数　合計	8	3					
14	エ	(1)	ピアノとの関わり	2	1	2			2	2
15	エ	(2)	真似したい，自分と比較	19	7	19	5		19	19
16	エ	(3)	演奏者	1	0	1	1		1	
17	エ	(4)	質問	12	4	12	4		12	12
			エ回答数　合計	34	12					
			回答数　総計	287	100	287	93	189	175	280

★表２右上の「それぞれの感覚」は，小川が児童の記述に従って，使用していると思われる感覚を５つに整理・分類した項目。

振り返り2自由記述について，ア，イ，ウ，エの各質問に関わる回答を内容毎に分類すると，表２のように 17 項目に分けられた。各項目についての児童の記述は，以下のようなものである。

ア(1)　響き

・空気が震えることを生身で実感でき，響きをよく感じることができた。
・響き，感じ方が CD とちがう。
・いろいろな声が混ざって CD よりとても響いているように感じた。
・体の奥まで響くように太くて深い。
・生だとよく響きが耳に届く。
・CD では響きは聴きづらかったが，生だとすごく響いていることがわかる。

ア(2)　音色，声種の違い等

・声の質が自分たちと全然違う。
・一人一人違う音色だけど深みがある。きれい。
・女声，肌が温まった。
・女声，声がまっすぐ行った後に広がる。
・ソプラノ好き。響いて駆け回って跳ねているみたい。
・バス，暗い声，まっ黒，広がる感じ。想像以上に太くて低い。きれい。大きい。想像以上に低い。
・男低い声。迫力ある。力強い。協調性がある。
・バス格好いい。聴いたことがなかった。
・大人になると，声が低くなることがわかった。
・大人になってからしか出せない声。

ア(3)　パートの重なり

・４パート支え合っている。しっかり聴こえる。楽器のようだった。
・各パートそれぞれの良さが伝わる。
・パートが増えると深みや厚みが増す。
・パートに特徴がある。それを探すのも楽しい。
・９人の声がまとまって，きれいでびっくり。

ア(4)　迫力・圧

・生は迫力が全然違う。CD より遥かに迫力ある。
・重圧感，圧迫感ある。耳にズキューンときた。

・男声四部，一言一言がこっちに迫ってくるよう。CD より，音の高さが違うと思った。
・箱根八里，箱根の山の凄さを表していて，大きい壁がまるであるかのような気がした。
・箱根八里，一人一人が主役のような歌い方。迫りくるような迫力。圧倒された。無意識のうちに工夫が生まれている。

ア⑸　音程
・音程がいい，ぶれない。

ア⑹　雰囲気等
・声の大きさもだが，雰囲気が重かったり軽かったりと，CD では味わえないので新鮮だった。
・独唱も合唱も，全員声の高さは違うのに一体になっている。
・歌というのは，体でなく，歌声で表現するものだと思った。

ア⑺　もう一度聴きたい
・もう終わり？もっと聴きたかった。
・聴いたことがないからいい経験になった。また聴きたい。
・もう一度聴きたい。

イ⑴　姿勢，表情
・全員堂々として，遠くを見つめている。
・体がリズムにのりながら動く。歌を全身で感じているよう。
・手が動く。手でも表現している
・口が大きいときと小さいときがある。
・歌う前に口の準備をして，それから言葉をしゃべっている。
・表情や声のトーンが CD より断然よい。
・顔の表情が歌の感じと似ていて，本当にそこにいるかのような表情で歌っていたので不思議。歌い方を工夫することで聴いている人の表情を変えられることを知った。

イ⑵　強弱
・生の方が，強弱やパートが分かれているのがわかりやすい。
・強弱が見えた。はっきりしている。激しい。
・クレッシェンドがはっきり。ビブラートがすごい。
・強弱，伸ばし方一つで歌があんなにも変わるのに驚いた。

イ⑶　ブレス
・ブレスで音楽をつくっている。
・ブレスが深く入っている。
・表現によって，息の吸い方を変えている。

イ⑷　情景，歌詞
・場面によって，息の吸い方，高さ，低さを生かしている。
・曲に合ったイメージの仕方がわかる。
・情景が浮かぶ。

イ⑸　声の出し方・歌い方
・ビブラート，強弱，音色等，歌がよりきれいに美しくなる工夫が全て入っている。
・出だしと終わり揃っている。
・声の出し方がわかった。

ウ⑴　集中
・集中して聴けた。CD にはスピーカーからのサーッという雑音があるので集中できない。
・CD は繰り返しがきくが，生は１回しか聴けないので集中して聴けた。
・せっかく歌ってくれているという気持ちになって集中して聴けた。
・演奏会などにあまり興味がなかったけど，また聴きたいと思った。長時間聴いていても飽きない。歌に興味がなかった私が歌をめちゃくちゃ集中して聴けたのは初めてだったのでびっくりした。私もきれいな声で歌いたい。
・緊張感があって集中して聴けた。

エ⑴　ピアノとの関わり
・ピアノ伴奏が，歌っている人に合わせてとてもきれい。
・ピアノなしのところ，深みがある。

エ⑵　真似したい，自分と比較
・CD では聴き取れなかった声の操りや高さもよくわかった。自分はまだまだだということもわかった。
・後輩に教えたい，来年に生かしたい。
・自分はぴたりと音が合ってきれいにはまったことがない。他のパートを聴きながら歌うことをがんばりたい。
・ブレスで音楽をつくる。取り入れたい。
・自分は 1／10 しかできていない。10／10 に到達したい。
・テノールやバスの低い声を出してみたい。

エ⑶　演奏者について

・お寺で働いている人や理科を研究している人もうまい。

エ⑷　質問

・深いブレスはどうやったらできるの？
・歌を習っている人は，具体的にどのようなことをしているのですか。
・強弱の差をどうやってつける？
・子音と母音のバランスを保つための工夫は？
・ソプラノの人へ。どうやったら透き通ってきれいな声が出せるのですか？

表２の 17 項目の内容について，ア，イ，ウ，エの質問毎の回答数の合計，及びそれらが総回答数に占める割合を示したものが，表３である。

表３　振り返り2自由記述の質問毎の回答数

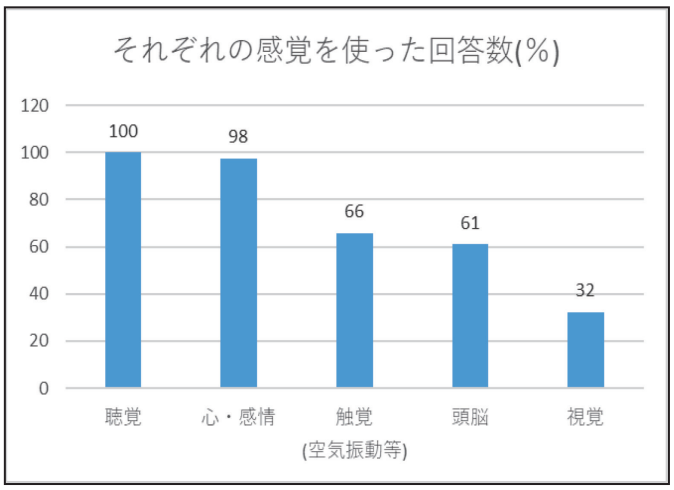
	回答数（個）	回答数（%）
ア	180	63
イ	65	22
ウ	8	3
エ	34	12

また，17 項目の各内容について，児童が使っていると思われる感覚を５つに分類すると，表２のようになった。それぞれの感覚に関わる回答数の合計，及びそれらが総回答数に占める割合を示したものが，表４とグラフ１である。

表４　使っていると思われる感覚（総回答数 287 個）

	聴覚	心・感情	触覚（空気振動等）	頭脳	視覚
それぞれの感覚を使った回答数(%)	100	98	66	61	32
それぞれの感覚を使った回答数(個)	287	280	189	175	93

グラフ１　使っていると思われる感覚（%）



グラフ１から，児童は，聴覚だけでなく，複数の感覚を使って生演奏を鑑賞していることがわかる。耳で聴き，目で見て，考え，心を動かし，自分や演奏者の感情を読み取り，触覚で空気振動などを感じながら鑑賞しているといえる。

（２）合唱部の個人レッスン

合唱部の４・５年生 22 名に対して，熊友会の７名に個人レッスンをしてもらい，その指導内容，児童の音楽表現の変化，及び児童同士の関わり方の変化を調べた。各講師が３～４名の児童を受け持ち，レッスン中，小川は講師陣の指導内容と指導の様子を観察した。講師陣は，個々の課題を瞬時に的確に捉え，児童のよさを引き出し，伸びやかに歌えるための方策を比喩や範唱によって示していた。

レッスン後，児童にわかったことを記述させることによって，指導内容を把握した。児童の記述を分析すると，個人レッスンの指導内容は，表５に示したような 13 項目に分類できた。これらのうち，「言葉に関するもの」とは，「２回くり返す歌詞は，大切な方の子音を長くする」「大事な言葉を強調する」「はじめの言葉は，はっきりと発音する」といった記述のことである。「意識」に関する記述は，「できていない場所をわかって，次に練習する」「伸ばす音に自信をもち，堂々と歌う」といったものである。「情景」とは，「理想の情景を考える」「場面が変わるときは，ガラっと変える」「大切な友達を思い浮かべながら歌う」といった記述である。「表現」とは，「１回目よりもはかない感じで歌う」「相手を楽しませる音楽をする」などの指導内容である。

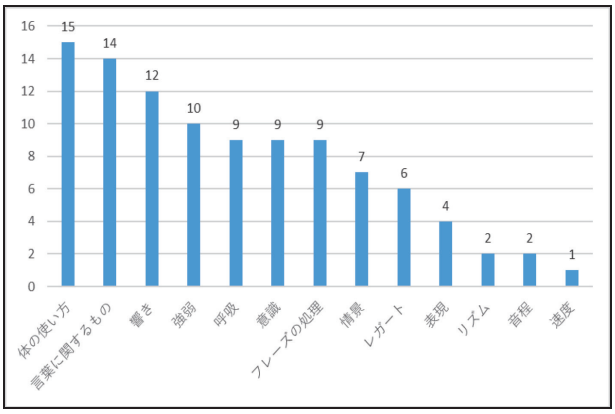
13 項目の指導内容について，各項目に関わる記述数が総記述数に占める割合を示したものが，表５とグラフ２である。

児童はその後の合唱部での練習の際に，個人レッスンで自分が言われたことを，友人にアドバイスしたり，練習の振り返りで述べたりして，活用していた。

表５　個人レッスンの指導内容（22 名）

指導内容	回答数（個）	回答数（%）
体の使い方	12	15
言葉に関するもの	11	14
響き	10	12
強弱	8	10
呼吸	7	9
意識	7	9
フレーズの処理	7	9
情景	6	7
レガート	5	6
表現	3	4
リズム	2	2
音程	2	2
速度	1	1
計	81	100

グラフ２　個人レッスンの指導内容（%）



４　考　察

（１）５年生の鑑賞の授業

振り返り2のアンケートから，特に「ア　大人の歌声や色々な合唱の響きについて」の回答の内訳の通り，響きや声種，迫力の凄さを感じ取っている児童が多くいた。それらについて感じる時には，聴覚や視覚だけでなく，肌の感覚を使っていると考えられる。音がホール全体に共鳴する感覚や，自分に迫ってくる感覚，音圧や空気振動を感じる感覚，つまり触覚である。鑑賞後の感想では，「とにかく圧がすごい」「ホールが響いて，体が包まれる感じがした」などと語っている児童が散見された。普段の CD や DVD など電子媒体での鑑賞では，ホールの響きや音圧について感想を持つ児童はほとんどいない。この感想は，生の演奏ならではのものである。

触覚について，山口創は次のように述べている。「五感の内触覚以外の４つは，それぞれ目や耳、舌，鼻といった特殊な器官で知覚しているので特殊器官という。（中略）それに対して触覚は，特殊な受容器官をもたず，体の抹消（神経端末）に散在している無数の受容器官から伝わる。この感覚を体性感覚という。体性感覚には，皮膚の外部からの情報を伝える皮膚感覚と，皮膚の内部の情報（筋肉や関節などの運動感覚や身体各部の位置感覚）を知らせる固有感覚がある。この皮膚感覚が，一般に『触覚』と呼ばれる感覚である。皮膚感覚には，本来の意味での触覚以外に，圧覚，痛覚，温度感覚なども含まれる」（山口　2006，p. 16）。生演奏の鑑賞で児童が感じた迫力は，演奏者が発する緊張感ある空気と，音の圧力を感じ取った結果ではないか。緊張感のある空気や音の圧力は，視覚や聴覚だけでなく，皮膚感覚で感じ取ったといえるのではないか。

山口は次のようにも述べている。「皮膚感覚は自己と外界の境界線上に生じ，自己と自然的，社会的環境との関係を直感的に捉える重要な感覚である。そこで私たちはしばしば，皮膚感覚で直感的に判断している。ある部屋に入ったとき『緊張した空気に包まれていた』などとよくいう。（中略）このような判断は，皮膚のもつ感覚的な判断とでもいえるだろうか。（中略）脳や神経は，内側に入り込むのに対して，外側にそのまま露出しているのが皮膚である。皮膚自体が脳の働きをしていてもおかしくはない」（山口　2006，pp. 50-51）。実際に児童は，「歌っている人の表情から，どんな情景なのかがわかった」「歌っている人の集中力がすごくて，自分も集中した」などの感想を述べており，視覚と皮膚感覚から，場の空気を感じ，緊張感をもって鑑賞していたことがわかった。

音楽を聴くことについて，岡田暁生は次のように述べている。「聴く喜びはかなりの程度で、語り合える喜びに比例する。音楽の楽しみは聴くことだけではない。『聴くこと』と『語り合うこと』とが一体となってこそ音楽の喜びは生まれるのだ」（岡田 2009，p. ii）。CD や DVD による電子媒体での鑑賞であっても，空気の振動はあり，教師の発問や授業の組み立てによって，語り合いたくなる鑑賞の授業は構成できる。しかし，スピーカーを通して聴く電気信号を介した音楽や二次元の映像は，本物ではない。実際の生演奏の方が集中力が増し，感動が大きくなるのは，音の他に，何か重要な皮膚感覚に訴えるものがあるからだといえる。

視覚と触覚の関係について，山口は次のように述べている。視覚によって得られる形や大きさなどの空間観念は，触覚の作用によるものである。乳幼児が物をなめる行為は，視覚の基礎を作る。「例えばコップを見て『丸い』と感じるのは，その視覚の奥底に，幼児期にコップの縁に沿って何度も舌でなぞった感覚の記憶が横たわっているからだ」（山口 2009，p. 191）。

生の演奏，本物の体験を児童に与えることは，乳幼児の時期に触覚で物の形を認識することと類似しているのではないか。児童の感想の中に，「CD だとよくわからなかったけれど，テノールとバスは音の高さが違うとよくわかった」といった内容のものが複数見られた。このことは，本物を，皮膚感覚を使って聴き味わって初めて，ソプラノは

どのような音域でどんな声質か，アルトとどう違うのか，テノールとバスの違いは何なのか，何によって聴き分けるのか，などを感じ取ることができるということである。乳幼児が触覚で視覚の基盤を作っているように，児童は生の音を聴いて初めて，皮膚感覚を伴う聴覚での理解ができるのではないか。このような感覚が育ってから，ソプラノよりもアルトが好きだ,などと語ることができるようになると考えられる。

聴覚，視覚の他，皮膚感覚を研ぎすませ，集中して聴き取った生演奏の音楽は，他者と共有したい語り合いたい音楽として児童の心に残り，協働的な音楽活動につながった。自分の演奏をよりよくしたいと目標を掲げた児童も多い。また，「こういうものに全く興味がなかった自分が，感動してもう一度聴いてみたいと思っていることに驚いている」という児童の感想も複数あった。

上記のように音楽に浸り，語りたくなる授業を構成すれば，対話のある協働的な学びをすることが可能になる。驚きや喜びが生まれる授業は，協働的に学び，自分の音楽活動に学んだことを反映させる児童を育成する。

（２）合唱部の個人レッスン

個人レッスンでは，全児童が声量，音程共に改善された。指導の内容のみでなく，美しい歌声の範唱を聴くこと，実際に美しく豊かな声量で歌う人を目の前にしたことも，児童の意欲と理解力，表現力を高めていた。

身体模倣について，明和政子は次のように述べている。「他者の意図，他者が何を望んでいるのか，何を信じているのかを理解する能力は，『心の理論』と呼ばれています。このような心のはたらきが発達するための基盤となる役割を，身体模倣が果たすという見方があります。（中略）身体模倣は，自分自身が同じ行為で得た経験を，観察した他者の行為に照らし合わせることを可能にします」（明和 2012，p. 151）。

個人レッスンは，歌う人の模倣をすることで，体の使い方，口の開け方など，教える側と教えられる側の両者にとってすぐに照らし合わせて判断することができる優れた方法なのだと再認識することができた。児童は優れた声楽家を目の前にしてその言葉に納得し，自然にその人の姿勢や手の動きを模倣していた。自分の課題を自覚して改善しようと試みていることが見て取れた。そのため，その後の歌声はどの児童も各段に上達していた。これは，知識として得た情報を体で処理し，音楽表現力を高めた姿といえる。さらに，友達の演奏に対するアドバイスなどのやり取りも，それまでよりも相手の歌を聴いてより的確に言語化して伝え合うことができるようになった。

５　まとめ

生の演奏は，CD や DVD などの電子媒体を通した演奏よりも，人の五感，特に触覚（皮膚感覚）に強く働きかけることができ，心を動かす。生演奏に浸ることによって得た感動を他者と共有したくなり，友達と生き生きと感想を交流する対話が増える。このことから，協働的に音楽活動する児童が育ってきたといえる。

また，合唱部の活動では，個人レッスンを受けることで，自分の発声の癖を理解し，教示された体の使い方を意識したり模倣したりすることで，正しい発声の仕方がわかり，自主練習の際の自己評価も正しくできるようになった。そのことで，友達の演奏に対して「声が前に飛んでいる」「お腹を使ってもっと強く息を送るといい」「音がつながっていない」など，息の流れや筋肉の動き，レガート唱法について着眼してアドバイスし合えるようになった。歌うために必要な技術を理解しながら習得することで，他者と協働的に音楽活動をすることができるようになり，一人一人の表現力も向上したといえる。

本研究では，小学校４・５年生の児童を対象として，生演奏の鑑賞や，対面での個人レッスンの効果を考察した。その結果，音や音楽に浸り，協働的に音楽活動をするためには，優れた本物の，生の演奏に触れさせることが極めて重要であることが明らかになった。

謝辞

この研究に取り組んだことで，児童が夢中になって音楽を聴いたり，繰り返し練習をして自分の力を伸ばしたりする姿を見ることができました。本研究を進めるにあたり，演奏やレッスンを快く引き受けてくださった在原泉先生はじめ熊友会ヴォーカル・アンサンブルの皆様，熊友会の活動を推進してくださった佐々木正利先生に，心より御礼申し上げます。

また，コロナ禍の中における研究を推進して頂けた岩手大学，歌唱の鑑賞会に理解を示して会の企画を応援してくださった本校の学校体制にも感謝します。

引用文献

岡田暁生（2009）『音楽の聴き方』中央公論新社。
明和政子（2012）『まねが育むヒトの心』岩波書店。
山口　創（2006）『皮膚感覚の不思議』講談社。